

涅槃の考察（1）

— 肇論と中国仏教（四） —

古 賀 英 彦

涅槃無名論第四（その一）

1 奏秦王表

僧肇言、肇聞天得一以清、地得一以寧。君王得一以治天下。伏惟陛下觀哲欽明、道与神会。妙契環中、理無不統。游刃万機、弘道終日。威被蒼生、垂文作則。所以域中有四大、而王居一焉。

〔訓 読〕

秦王に奏むる表

僧肇言わく、肇は聞くならず、天は一を得て以て清く、地は一を得て以て寧く、君王は一を得て以て天下を治む、と。伏して惟うに、陛下は觀哲欽明にして道は神と会す。妙に環中に契い、理として統べざるは無し。万機に游刃し、弘道するもの終日。威は蒼生を被い、文を垂れて則を作る。域中に四大有りて、而して王の一に居る所以なり。

〔和 訳〕

秦王にたてまつる文書

曾肇が申し上げます、私は、天は一を得たことによつて清く、地は一を得たことによつて寧く、君王は一を得たことによつて天下を治める、と聞いております。

伏しておもみるに、陛下は叡哲欽明であり、治道は神聖のはたらきと一つになっております。玄妙に自在力を得られ、道理として続べおさめないものはない。万機に游刃して、ひねもす仏道を弘めておられます。威徳は万民をおおい、文を垂れて則を作られます。世界には四つの偉大なものがあつて、王がその一つに居るゆえんであります。

2 涅槃之道、蓋是三乘之所帰、方等之淵府。渺茫希夷、絶視聽之域。幽致虚玄、殆非群情之所測。

〔訓 読〕

涅槃の道は蓋し是れ三乗の帰する所にして、方等の淵府なり。渺茫希夷にして視聽の域を絶す。幽致虚玄にして殆ど群情の測る所には非ず。

〔和 訳〕

涅槃の道は思うに三乗の帰するところであり、方等教の集まる所。渺茫として見えず聞こえず、視聽の領域と隔絶しております。幽致虚玄で、ほとんど群情の測り知るところではありません。

○涅槃之道 「寂滅不動の聖心のはたらき。本論12へ段「神道」の注参照。

3 肇以人微、猥蒙国恩、得閑居学肆。在什公門下十有余載。雖衆經殊致、勝趣非一、然涅槃一義、常以聽習為先。肇才識闇短、雖屢蒙誨諭、猶懷疑漠漠。為竭愚不已、亦如似有解。然未經高勝先唱、不敢自決。

〔訓 読〕

肇は人微なるを以て、猥りに国恩を蒙り、学肆に閑居することを得たり。什公の門下に在ること十有余載なりき。衆経は致を殊にし、勝趣は一に非ずと雖も、然れども涅槃の一義は、常に聴習を以て先と為す。肇は才識闇短にして、屢しばしばしば誨諭を蒙むると雖も、猶お懷疑して漠漠たり。愚を竭くすことを為して已まざれば、亦た解すること有るが如と似し。然れども未だ高勝の先唱を経ざれば、敢えて自ら決せず。

〔和訳〕

私は取るに足らぬ者でありながら、みだりに国恩をこうむり、学問所につらなることができませんでした。什公の門下に有ること十有余年であります。もろもろの經典は伝えるところを異にし、旨趣は一つではありません。しかし涅槃の一義のみは聞き習うことを常に先とします。私は才識闇短で、しばしばおさとしをこうむりながら、なお疑いを抱いてもやもやしておりましたが、愚かな考えをつくして已まなかつたので、やはり解つたところがあるようであります。しかし未だ高勝の先唱を見ていないので、自ら決するわけには参りません。

4 不幸什公去世、諸參無所、以為永慨。而陛下聖德不孤、独与什公神契。目擊道存、快尽其中方寸。故能振彼玄風、以啓末俗。

〔訓読〕

不幸にして什公は世を去り、諸參するに所無く以て永き慨きと為す。而るに陛下は聖徳は孤ならず、独り什公と神契せり。目撃して道存し、快く其の中に方寸を尽くせり。故に能く彼の玄風を振り、以て末俗を啓く。

〔和訳〕

不幸にも什公が世を去られたので、諮問する所がないのが永遠のなげきです。しかるに陛下は、聖徳は孤ならずで、独り什公と精神があい契われました。一目見ただけで道がそなわることがわかり、すみやかにその中に心を尽くされ

ました。故にかの玄風をふるつて末世を啓蒙しておられます。

5 一日遇蒙答安城侯姚嵩書、問無為宗極。何者、夫衆生所以久流轉生死者、皆由著欲故也。若欲止於心、即無復於生死。既無生死、潛神玄默、与虚空合其德、是名涅槃矣。既曰涅槃、復何容有名於其間哉。

〔訓読〕

一日遇たま安城侯姚嵩の書の、無為の宗極を問うに答うることを蒙れり。何とならば、夫れ衆生の久しく生死に流轉する所以の者は、皆な欲に著するに由るが故なり。若し欲の心に止まば即ち生死に復かえること無からん。既に生死無ければ、神を玄黙に潜め、虚空と其の徳を合す、是れ涅槃と名づくるなり。既に涅槃と曰う、復はた何ぞ其の間に名有るべけんや、と。

〔和訳〕

ある日たまたま、安城侯姚嵩が手紙で、無為の至理について問うたのに答えられました。

なぜかという、そもそも衆生が久しく生死に流轉するゆえんは、皆な欲望に執著するからである。もし欲望が心において止滅すれば、生死にかえることはなくなるであろう。すでに生死がないのであるから、精神を玄黙の境地に深くひそませ、虚空とその特性を等しくする、それを涅槃と名づけるのである。すでに涅槃というのであるから、いったいどうして言葉がその間に有りうるであろうか、と。

○安城侯姚嵩書 『肇論研究』参照。姚嵩と姚興の手紙は、広弘明集十八に収められている。

6 斯乃窮微言之美、極象外之談者也。自非道参文殊、德侔慈氏、孰能宣揚玄道、為法城壘。使夫大教卷而復舒、幽旨淪而更顯。尋玩殷勤、不能暫捨。欣悟交懷、手舞弗暇。豈直當時之勝軌、方乃累劫之津梁矣。

〔訓読〕

斯れ乃ち微言の美を窮め、象外の談を極むる者なり。道は文殊と参わり、徳は慈氏に侔しきに非ざるよりは、孰か能く玄道を宣揚し、法の城壘と為り、夫の外教の巻けるをして而ち復た舒びしめ、幽旨の論みたるをして而ち更に顕われしめん。尋玩すること殷勤、暫らくも捨く能わざりき。欣悟は懐に交じり、手の舞うに暇あらず。豈に直に當時の勝軌のみならんや、方に乃ち累劫の津梁なり。

〔和訳〕

これこそ微言の美を窮めたものであり、象外の談を極めたものであります。道は文殊菩薩と等しく、徳は弥勒菩薩と等しくないかぎり、たれか玄道を宣揚し、法のまもりとなつて、かの巻きおさめられていた外教をふたたび舒びさせ、淹没していた幽旨をあらためて現われさせることができましようか。ねんごろに熟読吟味し、暫らくも手ばなすことができませんでした。よろこびと領悟とが心中にこもごも起こり、手の舞いにいとまがない次第でした。ただに当代のすぐれた軌範であるだけでしようか、それどころか累劫の津梁なのであります。

○玄道 菩提涅槃をいう。

7 然聖旨淵玄、理微言約。可以匠彼先進、拯拔高士。懼言題之流、或未尽上意。庶擬孔易十翼之作、豈貪豐文。因以弘顯幽旨、輒作涅槃無名論。論有九折十演。博采衆經、託證成喻、以仰述陛下無名之致。豈曰闕詣神心、窮究遠当。聊以擬議玄門、班喻学徒耳。

〔訓読〕

然れども聖旨は淵玄にして、理は微に言は約なり。以て彼の先進を匠え、高士を拯拔す可くも、言題の流は或いは未だ上意を尽くさざらんことを懼る。庶くは孔易十翼の作に擬らえん、豈に文を豊かにすることを貪らんや。以て弘

く幽旨を顯さんことを図り、輒ち涅槃無名論を作れり。論に九折十演有り。博く衆經に采り、證を託し喩を成し、以て仰ぎて陛下の無名の致を述べたり。豈に神心に闕詣し、窮究して遠く当ると曰わんや。聊さか以て玄門を擬議し、班かちて学徒を喩さんとするのみ。

〔和訳〕

しかしながら論旨は深遠であり、論理は微妙であつて言説は簡約であります。それによつて上級者を教え、高士を救済することはできませんが、言語文字にとられる者たちは、或いは未だ陛下の意を尽くさないのではないかと恐れます。そこで願わくは、孔子の易の十翼の作にならいたいのですが、文を豊かにすることを貪ほろうとするのはありません。それによつて大いに幽旨を明らかにしようと思つて、勝手ながら涅槃無名論を作りました。

論には九折(九個の問難)と十演(十個の説明)とがあります。ひろく衆經の語を採取して、證拠としたり譬喩としたりしながら、陛下の無名の趣旨を仰いで祖述いたしました。とても御心に通曉し、窮め究めて深く當つてはいえませんが、いささかもつて玄門について思考し議論し、学徒に分かつて喩そうとするのみであります。

8 論末章云、諸家通第一義諦、皆云廓然空寂、無有聖人。吾常以為太甚徑庭、不近人情。若無聖人、知無者誰。実如明詔、実如明詔。

〔訓読〕

論末の章に云わく、諸家は第一義諦を通じて皆な云う、廓然空寂にして聖人有る無し、と。吾は常に以て太甚だ徑庭して人情に近からずと為す、若し聖人無くんば、無を知る者は誰ぞや、と。実に明詔の如し、実に明詔の如し。

〔和訳〕

論末の章にいう、諸家は第一義諦を解して皆ないう、廓然空寂であつて、聖人はいない、と。吾人は常に、はなは

だへだたつていて人の常識からかけはなれていると思う。もし聖人がいなければ、無を知る者は誰なのか、と。まことに仰せのとおり、まことに仰せのとおりであります。

9 夫道恍惚窅冥、其中有精。若無聖人、誰与道游。頃諸学徒莫不躊躇道門、怏怏此旨。懷疑終日、莫之能正。幸遭高判、宗徒囂然。扣関之儔、蔚登玄室。真可謂法輪再転於閻浮、道光重映於千載者矣。

〔訓読〕

夫れ道は恍惚として窅冥、其の中に精有り。若し聖人無くんば、誰か道と遊ばん。頃ろ諸の学徒は、道門に躊躇して此の旨に怏怏たらざるは莫し。懷疑すること終日にして、之を能く正すもの莫し。幸いに高判に遭いて宗徒は囂然たり。関を扣くたたの儔は蔚として玄室に登る。真に謂いつ可し、法輪は再び閻浮に転ぜられ、道光は重ねて千載に映ゆる者なりと。

〔和訳〕

そもそも道というものはおほげで見定めがたいものであるが、その中に精神がある。もし聖人がいなければ、誰が道とあそぶであろう。ちかごろもろもろの学徒は、仏道の門に入ることを躊躇し、この点をめぐつてもやもやしていない者はありません。ひねもす懷疑して、それを正しうる者もおりません。ところが幸いにも明断にめぐり会い、宗徒は心が開けました。仏道の関門をたたくひとびとが盛んに玄室に登っております。まことにこういうべきです、法輪が再び閻浮に転ぜられ、道光が重ねて千載に映えるものであると。

10 今演論之作旨、曲弁涅槃無名之体、寂彼廓然、排方外之談。条牒如左、謹以仰呈。若少參聖旨、願勅存記。如其有差、伏承指授。僧肇言。

〔訓読〕

今の演論の作旨は、曲つみきに涅槃無名の体を弁じて、彼の廓然を寂し、方外の談を排せんとす。条牒すること左の如し、謹しんで以て仰呈す。若し少しく聖旨に參ぜば、願くは勅して存記せしめよ。如し其れ差うこと有らば、伏して指授を承けん。僧肇言う。

〔和訳〕

今の本論の作意は、つぶさに涅槃無名の体を弁じて、かの廓然空寂の説をしりぞけようとするものです。条を逐つて左のように文にしました。謹んで仰ぎ呈します。もし少しでも聖旨にかなえば、どうか勅して記録にとどめさせられますように願います。もし差うことがあれば、伏して指授をうけたまわります。僧肇言上す。

11 泥曰、泥洹、涅槃、此三名前後異出。蓋是楚夏不同耳。云涅槃、音正也。

〔訓読〕

泥曰と泥洹と涅槃とは、此の三名は前後して異なり出づ。蓋し是れ楚夏の異なるのみ。涅槃と云うは、音の正しきなり。

〔和訳〕

泥曰と泥洹と涅槃とは、この三つの言葉は前後して異なって出現した。けだし楚夏の不同に過ぎない。涅槃というのが正音である。

12 九折十演者

イ開宗第一

無名曰、經稱有余涅槃、無余涅槃者、秦言無為、亦名滅度。無為者、取乎虛無寂寞、妙絕於有為。滅度者、言其大患永滅、調度四流。斯蓋是鏡像之所歸、絕稱之幽宅也。而曰有余無余者、良是出處之異号、応物の仮名耳。

〔訓 読〕

九折と十演なる者は

宗を開く

無名曰わく、經に有余涅槃、無余涅槃と稱する者は、秦には無為と云い、亦た滅度とも名づく。無為なる者は、虚無寂寞にして、妙に有為を絶つに取る。滅度なる者は、其の大患永く滅し、四流を調度するを言う。斯れ蓋し是れ鏡像の歸する所にして、絶稱の幽宅なり。而も有余無余と曰う者は、良に是れ出處の異号にして、応物の仮名なるのみ。

〔和 訳〕

九折と十演とは

宗旨の開示

無名がいう、經典に有余涅槃、無余涅槃と稱するものは、中国では無為と云い、また滅度とも名づける。無為といふのは、虚無寂寞で、玄妙に有為を絶つているところを取る。滅度といふのは、大患が永久に滅しており、四瀑流しほりゅうを超え渡つているところを言う。これはけだし万法の歸する所であり、名稱の絶えた幽宅である。しかも有余といふ無余といふのは、現われているか隠れているかによる異つた呼び方であり、衆生に対応するための仮りの名稱に過ぎないのである。

口余嘗試言之、夫涅槃之為道也、寂寥虚眩、不可以形名得。微妙無相、不可以有心知。超群有以幽升。量太虚而永久。隨之弗得其蹤、迎之罔眺其首。六趣不能撰其生、力負無以化其体。潢濟惚恍、若存若往。五目不覩其容、二聽不聞其

響。冥冥窅窅、誰見誰曉。彌綸靡所不在、而独曳於有無之表。

〔訓 読〕

余は嘗つて試みに之を言えり、夫れ涅槃の道^た為るや、寂寥虚眩にして、形名を以て得可^べからず。微妙無相にして、有心を以て知る可^べからずと。群有を超えて以て幽升し、太虚を量^いれて而して永久なり。之に随うも其の蹤を得ず、之を迎うるも其の首を眺むる罔し。六趣は其の生を撰する能わず、力負も以て其の体を化する無し。潢漭惚恍として存するが若^{ごと}く往けるが若し。五目は其の容を覩ず、二聴は其の響を聴かず。冥冥窅窅として誰か見て誰か曉らん。彌綸^{みりん}して在らざる所靡^なく、而も有無の表に独曳す。

〔和 訳〕

私はかつて試みにこういったことがある。涅槃の道というものは、空のまた空、形や名によつて認めることはできないし、微妙無相であつて、有心によつて知ることとはできない、と。群有を超えて幽升し、太虚を容れて永久である。これにつきしたがつてもその跡は認められないし、これをむかえてもその頭は見られない。六趣はその活動を制御できないし、時間もその体をうつろわせることはない。はてしなくさだかでなく、とどまっているようでもあり行つてしまつたようでもある。いかなる眼もその容を見ないし、いかなる耳もその響を聞かない。かそけくふかく、誰が見て誰が知るであろう。遍満して存在しないところはなく、しかも有無の外に独脱しているのである。

○余嘗試言之 劉遺民書問附25口参照。

八然則言之者失其真、知之者反其愚。有之者乖其性、無之者傷其軀。所以釈迦掩室於摩竭、浄名杜口於毗耶。須菩提唱無説以顕道、釈梵絶聽而雨華。斯皆理為神御、故口以之而黙。豈曰無弁、弁所不能言也。

〔訓 読〕

然らば則ち之を言わんとする者は其の真を失い、之を知らんとする者は其の愚に反る。之を有とする者は其の性に乖き、之を無とする者は其の軀を傷う。所以に釈迦は室を摩竭に掩い、淨名は口を毗耶に杜じたり。須菩提は無説を唱えて以て道を顕わし、釈梵は聴くことを絶ちて而して華を雨らせたり。斯れは皆な理の神御と為る、故に口は之を以てして而して黙せり。豈に弁無しと曰わんや、弁の言う能わざる所なるなり。

〔和訳〕

そうであるならば、それを言おうとする者は真実を失墜し、それを知らうとする者は愚者に反転する。それを有とする者はその本性にそむき、それを無とする者はその本体をそこなう。だから釈迦は室を摩竭に閉ざし、淨名は口を毗耶に閉ざしたのである。須菩提は無説を主張して道を明らかにし、帝釈天梵天は聞くことを絶つて讚嘆の花をあめふらせたのである。これは皆な至理が精神を制御していたからこそ、口はそれによつて黙したのである。どうして弁舌がなかったとおうか、弁舌では言うことができなところなのである。

二經云、真解脱者離於言數、寂滅永安。無始無終、不晦不明、不寒不暑、湛若虛空、無名無説。論曰、涅槃非有、亦復非無。言語道斷、心行處滅。

〔訓読〕

經に云わく、真の解脱なる者は言數を離れ、寂滅して永く安し。始めも無く終りも無く、晦からず明らかならず、寒からず暑からず、湛として虚空の若く、名も無く説も無し、と。論に曰わく、涅槃は有に非ず、亦復無に非ず。言語の道は断たれ、心行の処は滅せり、と。

〔和訳〕

經典にいう、真の解脱というものは言葉の範疇とは無縁であり、寂滅して永遠に平安である。始めもなく終りもな

く、暗くもなく明るくもなく、寒くもなく暑くもなく、虚空のように清浄であり、名もなく説もない、と。中論にいう、涅槃は有でもなくまた無でもない。言語の通じる道は断絶し、心のはたらく場所は消滅している、と。

亦尋夫經論之作、豈虛構哉。果有所以不有、故不可得而有。有所以不無、故不可得而無耳。何者、本之有境、則五陰永滅、推之無鄉、而幽靈不竭。幽靈不竭、則抱一湛然、五陰永滅、則万累都捐。万累都捐、故与道通洞、抱一湛然、故神而無功。神而無功、故至功常存、与道通洞、故冲而不改。冲而不改、故不可為有、至功常存、故不可為無。

〔訓 読〕

夫の經論の作を尋ぬるに、豈に虚構ならんや。果たして其の有ならざる所以有り、故に得て而して有とす可からず。其の無ならざる所以有り、故に得て而して無とす可からざるのみ。何とならば、之を有の境に本づくれば、則ち五陰は永く滅し、之を無の郷に推せば、すなわち幽靈は竭きざればなり。幽靈は竭きざれば則ち一を抱きて湛然たり、五陰は永く滅すれば則ち万累はすべて捐つ。万累はすべて捐つ、故に道と通洞す、一を抱きて湛然たり、故に神にして而も功無し。神にして而も功無し、故に至功の常に存す、道と通洞す、故に冲して而して改めず。冲して而して改めず、故に有と為す可からず、至功の常に存す、故に無と為す可からず。

〔和 訳〕

經論の成り立ちを考えてみると、どうして虚構であろうか。果たしてその有ではないゆえんがある、故に有であるとする事ができないのである。その無ではないゆえんがある、故に無であるとする事ができないのである。なぜとならば、それを有の領域にたずねてみると、五陰は永久に滅しており、それを無の領域にたずねてみると、靈性は尽きないからである。

靈性が尽きないから道を守って湛然不動である、五陰が永久に滅しているから万累はすべて尽きている。万累がす

べて尽きている、故に道と一体である。道を守って湛然不動である、故に精神として作用しながら功勳はない。精神として作用しながら功勳はない、故に至高の功勳が常に存在するのである。道と一体である、故に虚無であつて不変である。虚無であつて不変である、故に有だとすることはできない。至高の功勳が常に存在する、故に無だとすることはできないのである。

○神而無功 神有応会之用 (般若無知論第三の9)

へ然則有無絶於内、称謂淪於外。視聽之所不暨、四空之所昏昧。恬焉而夷、怕焉而泰。九流於是乎交帰、衆聖於是乎冥会。斯乃希夷之境、太玄之郷。而欲以有無題榜、標其方域、而語其神道者、不亦邈哉。

〔訓読〕

然らば則ち有無は内に絶え、称謂は外に淪む。視聽の暨およぶざる所にして、四空の昏昧する所なり。恬焉として而して夷、怕焉として而して泰なり。九流は是に於いてか交も帰し、衆聖は是に於いてか冥会す。斯れ乃ち希夷の境にして太玄の境なり。而も有無の題榜を以て其の方域を標し、而して其の神道を語らんと欲する者は、亦た邈はかならずや。

〔和訳〕

そうであるならば、有無は内に絶え、称呼は外に亡んでいる。視聽のおよばないところであり、四空天の不紊なところである。恬静でとらえどころがなく、淡泊でやすらかである。九流はこもごもここに帰り、衆聖はしらすしらずのうちにここに集まる。これこそ見ることも聞くこともできない境域であり、太玄の家郷である。それなのに有無の遍額によってその方域を標榜しようとし、その神道を語ろうとするのは、迂遠なことではないか。

○神道 聖神 (般若無知論10) の応会之道 (同26) のこと。つまり、聖心は変化して万物となり、万物の一つ一つに応接しながら和合する。そのはたらきを「応会之用」(同9) といい、「応会之道」ともいう。その時聖心は「神」とも「聖神」とも

呼ばれる。しかし常に寂滅不動であるから、その点を涅槃というのである。般若無知論3031段参照。

13 數体第二

イ有名曰、夫名号不虛生、稱謂不自起。經稱有余涅槃、無余涅槃者、蓋是返本之真名、神道之妙稱者也。請試陳之。有余者、謂如來大覺始興、法身初建、澡八解之清流、憩七覺之茂林。積万善於毗盧、蕩無始之遺塵。三明鏡於內、神光照於外。結僧那於始心、終大悲以赴難。仰攀玄根、俯提弱喪。超邁三域、独蹈大方。啓八正之平路、坦衆庶之夷途。騁六通之神驥、乘五衍之安車。至能出生入死、与物推移。道無不洽、德無不施。窮化母之始物、極玄樞之妙用。廓虛宇於無疆、耀薩雲於幽燭。將絶朕於九止、永淪太虛。而有余緣不尽、余迹不泯。業報猶魂、聖智尚存。此有余涅槃也。經云、陶冶塵滓、如鍊真金。万累都尽而靈覺独存。

〔訓読〕

体を覈ぶ

有名曰わく、夫れ名号は虚しくは生ぜず、稱謂は自らは起らず。經に有余涅槃、無余涅槃と稱する者は、蓋し是れ返本の真名にして、神道の妙稱なる者なり。請う試みに之を陳べん。

有余なる者は、謂わく、如來は大覺始めて興り、法身初めて建つや、八解の清流に澡ぎ、七覺の茂林に憩えり。万善を毗盧に積み、無始の遺塵を蕩う。三明は内に鏡し、神光は外に照らす。僧那を始心に結び、終に大悲以て難に赴く。仰ぎて玄根を攀じ、俯して弱喪を提ぐ。超えて三域を邁ぎ、独り大方を蹈む。八正の平路を啓き、衆庶の夷途を坦らにす。六通の神驥を騁せ、五衍の安車に乗る。能く出生入死するに至りて物と推移し、道は洽からざるは無く、徳は施こさざるは無し。化母の始物を窮め、玄樞の妙用を極む。虚宇を無疆に廓げ、薩雲を幽燭に耀かす。將に朕を九止に絶ちて永く太虚に淪まんとして、而も余縁の尽きざると余迹の泯びざると有り。業報は猶お魂し、聖智は尚お

存す。此れ有餘涅槃なり。經に云わく、塵滓を陶冶すること眞金を鍊るが如し。万累都べて尽きて而して靈覺独り存す、と。

〔和訳〕

自体の考察

有名がいう、そもそも名号はあだに生じはしないし、称呼は自然に起こるものではない。經に有餘涅槃、無餘涅槃というのは返本の真名であり、神道の妙称なのである。試みにこれを論じてみよう。有餘涅槃というのは、つまり、如来は大覺がはじめておこり、法身がはじめて成り立つと、八解脱の清流に身をすすぎ、七覺支の美林にいこわれた。万善を咄劫に積み、無始の遺塵を払ったのである。三明は内にあつて映し、神光は外に向かつて照らす。誓願を発心の時に結び、究極的に大悲によって苦難に赴くのである。上を向いてはさとりを求め、下を向いては迷える者を導く。三界を超越して独り大道を踐む。八正道の平路をひらき、衆生のための平坦な道をたいらかにする。六通の神馬を走らせ、五乗の安車に乗って衆生を運ぶ。

能く生死に出入するにいたつては衆生と共にあり、その道はあまねく行きわたり、その徳は加えられない者はいない。因縁のはじめを窮め、自然の妙用を極めている。法界を無窮にひろげ、一切智を奥深く照らすまでにかがやかす。その足跡を九地に絶つて永久に太虚に沈もうとして、しかも尽きない余縁と消えない余跡があり、業報はなお生きており、聖智はなお存在する。これが有餘涅槃である。

經典にいう、鉞滓を陶冶すること、眞金を鍊るときのようにして、万累がすべて尽きて、靈覺のみが独り存在する、と。

口無余者、謂至人教縁都訖、靈照永滅、廓爾無朕、故曰無余。何則、夫大患莫若於有身、故滅身以歸無。勞動莫先於

有智、故絶智以淪虚。然則智以形倦、形以智勞。輪轉修途、疲而弗已。經曰、智為雜毒、形為桎梏。淵默以之而遼、患難以之而起。所以至人灰身滅智、捐形絶慮。内無機照之勤、外息大患之本。超然与群有永分、渾爾与太虚同体。寂焉無聞、怕爾無兆。冥冥長往、莫知所之。其猶灯尽火滅、膏明俱竭。此無余涅槃也。經云、五陰永尽、譬如灯滅。

〔訓讀〕

無余なる者は、謂わく、至人は教縁都べて訖り、靈照は永く滅し、廓爾として朕無し、故に無余と曰う。何となれば則ち、夫れ大患は身有るに若くは莫し、故に身を滅して以て無に帰る。勞動は智有るに先んずる無し、故に智を絶ちて以て虚に淪む。然らば則ち智は形を以て倦れ、形は智を以て勞る。修途に輪轉し、疲れて而も已まず。經に曰わく、智は雜毒と為り、形は桎梏と為る。淵默は之を以てして而して遼かに、患難は之を以てして而して起こる、と。所以に至人は灰身滅智して形を捐て慮を絶つ。内に機照の勤め無く、外に大患の本を息む。超然として群有と永く分かれ、渾爾として太虚と体を同じくす。寂焉として聞く無く、怕爾として兆す無し。冥冥として長く往き、之く所を知る莫し。其れ猶お灯尽き火滅し、膏明俱に竭くるがごとし。此れ無余涅槃なり。經に云わく、五陰永く尽くること譬えば灯の滅するが如し、と。

〔和訳〕

無余涅槃というのは、つまり、至人は教化の因縁がすべて終ると、靈妙な照鑑も永久に滅し、廓然としてあとかたもない、故に無余というのである。

なぜなら、そもそも大患は身の有ることに及ぶものはない、だから身を滅して無に帰るのである。苦勞は智の有ることに過ぎるものはない、だから智を絶つて虚に没するのである。だとするならば、智は身によつてつかれ、身は智によつてつかれ、長途をめぐつてつかれてやまないのである。經典にいう、智は雜毒である、身は桎梏である。平安はそれによつて遠ざかり、患難がそれによつて起こる、と。

したがって至人は灰身滅智して、身を捨て慮を絶つのである。内には機に應じる照鑑のつかれなく、外には大患の本をなくし、超然として群有と永久に別れ、渾然として太虚と一体となる。寂焉として聞こえるものもなく、怕爾として兆しもない。冥冥として永遠に去って返らず、その行くところを知らない。あたかも灯が尽きて火が消え、灯油も光明も共につきたようなものである。これが無余涅槃である。

經典にいう、五陰が永久に尽きるのは、たとえば灯火が消えるようなものである、と。

ハ然則有余可以有称、無余可以無名。無名立則宗虚者欣尚於冲黙、有称生則懷德者弥仰於聖功。斯乃誥典之所垂文、先聖之所軌轍。

〔訓 読〕

然らば則ち有余は有を以て称す可く、無余は無を以て名づく可し。無の名立てば則ち虚を宗とする者は欣びて冲黙を尚び、有の称生ずれば則ち徳を懷う者は弥いよいよ聖功を仰ぐ。斯れ乃ち誥典の垂るる所の文にして、先聖の軌する所の轍なり。

〔和 訳〕

だとするならば有余は有によつて称しなければならぬし、無余は無によつて名づけなければならぬ。無の名が立つと虚無を宗旨とする人々はよろこんで冲黙を貴び、有の称が生じると徳を思う人々はますます聖人の功を仰ぐのである。これこそ經典が示したきまりであり、先聖が決めたきまりである。

二而曰有無絶於内、称謂淪於外、視聽之所不暨、四空之所昏昧。使夫懷德者自絶、宗虚者靡託。無異杜耳目於胎殻、掩玄象於霄外。而責宮商之異、弁玄素之殊者也。

〔訓読〕

而も曰わく、有無は内に絶え、称謂は外に淪む。視聽の暨ばざる所にして、四空の昏昧する所なり、と。夫の徳を懐う者をして自ら絶たしめ、虚を宗とする者をして託すること靡からしむ。耳目を胎殻に杜じ、玄象を霄外に掩いて、而も宮商の異を責め、玄素の殊を弁ぜんとする者に異なること無きなり。

〔和訳〕

しかもいう、有無は内に絶え、称呼は外に亡んでいる。視聽のおよばないところであり、四空天の不案内なところである、と。それではあの徳を思う人々をしてあとを絶たせ、虚無を宗旨とする人々をしてよりどころをなくさせるであろう。耳目を胎内にふさぎ、日月を雲外におおいながら、しかも五音のちがいを聞きわけさせようとしたり、黒白のちがいを見わけさせようとするのに異ならない。

ホ子徒知遠推至人於有無之表、高韻絶唱於形名之外。而論旨竟莫知所帰、幽途故自蘊而未顕。静思幽尋、寄懐無所。豈所謂朗大明於冥室、奏玄響於無聞哉。

〔訓読〕

子は徒らに、遠く至人を有無の表に推し、高く絶唱を形名の外に韻かすことを知るのみ。而も論旨は竟に帰する所を知る莫く、幽途は故より自ら蘊みて而して未だ顕われず。静思幽尋するも、懐を寄するに所無からん。豈に所謂の大明を冥室に朗らかにし、玄響を無聞に奏つる者ならんか。

〔和訳〕

貴方はいたずらに至人を遠く有無の外におしやり、絶唱を高く形名の外にひびかそうとするだけである。しかも論旨は結局帰するところを知らないし、幽途はもとより自ら隠れたままにまだ顕わではない。静思幽尋しても思いを

寄せるところが無いであろう。いわゆる茶毘の小屋で日月をかがやかせ、聞く者のいない時に妙なる調べを奏するよ
うなものではないであろうか。

14 位体第三

イ無名曰、有余無余者、蓋是涅槃之外称、応物之仮名耳。而存称謂者封名、志器象者耽形。名也極於題目、形也尽於
方円。方円有所不寫、題目有所不伝。焉可以名於無名、而形於無形者哉。

〔訓読〕

体を位す

無名曰わく、有余無余なる者は、蓋し是れ涅槃の外称にして、物に應ずるの仮名なるのみ。而して称謂を存する者
は名に封ぜられ、器象を志す者は形に耽^かる。名たるや、題目に極まり、形たるや、方円に尽く。方円は寫さざる所有
り、題目は伝えざる所有り。焉ぞ以て名無きものに名づけ、而して形無きものを形わす可き者ならんや。

〔和訳〕

自体の所在

無名がいう、有余無余というのは、けだし涅槃の表面的な名称であり、衆生に対応するための仮りの名に過ぎない。
しかるに称呼を保持する者は名に制限され、物象に執着する者は形に耽溺する。名というものは題目であるにとどま
り、形というものは方円であるにとどまる。方円にはかたどりえないものがあり、題目には伝ええないものがある。
どうしてそれによって名のないものに名づけ、形のないものを表わすことができようか。

口難序云、有余無余者、信是権寂致教之本意、亦是如来隱顯之誠迹也。但未是玄寂絶言之幽致、又非至人環中之妙術

耳。子独不聞正觀之說歟。維摩詰言、我觀如來無始無終、六入已過、三界已出、不在方、不離方。非有為、非無為。不可以識識、不可以智知。無言無說、心行處滅。以此觀者、乃名正觀。以他觀者、非見仏也。放光云、仏如虚空、無去無來。応縁而現、無有方所。

〔訓 詁〕

難に序し、有餘無余と云う者は、信に是れ權寂致教の本意にして、亦た是れ如來隱頭の誠迹なり。但だ未だ是れ玄寂絶言の幽致ならず、又た至人環中の妙術なるに非ず。子は独り正觀の說を聞かざるか。維摩詰言わく、我は如來の無始無終なるを觀る。六入は已に過ぎ、三界は已に出づ。方に在らず、方を離れず。有為に非ず、無為に非ず。識を以て識る可からず、智を以て知る可からず。無言無說にして心行處は滅す。此を以て觀る者は乃ち正觀と名づく。他を以て觀る者は仏を見るには非ず、と。放光に云わく、仏は虚空の如く無去無來なり。縁に應じて而して現われて方所有ること無し、と。

〔和 訳〕

論難にのべて有餘無余といっているものは、まことに權教実教が教を立てるときの本来の考えであり、また如來が隱顯した真実の迹のことである。ただいまだ玄寂絶言の幽致をいうのではなく、また至人自在の妙術をいうのではない。貴方は正觀の說を聞いていないのだろうか。

維摩詰にいう、私は如來が無始無終であるのを觀る。六入はすでに過ぎ、三界はすでに出ている。方所にとどまらず、方所を離れない。有為でもなく無為でもない。識によつて認識することはできないし、智によつて覚知することもできない。無言無說であつて心のはたらく場所はほろんでゐる。このように觀てはじめて正觀と名づけるのである。ほかの仕方では觀るときは仏を見ない、と。

放光般若經にいう、仏は虚空のように去來しない。しかし縁に應じて姿を現わすが、方所にはとどまらない、と。

○維摩詰言、放光云 出典については「肇論研究」参照。

ハ然則聖人之在天下也、寂莫虚無、無執無競。導而弗先、感而後応。譬猶幽谷之響、明鏡之像。对之弗知其所以来、隨之罔識其所以往。恍焉而有、惚焉而亡。動而逾寂、隱而弥彰。出幽入冥、變化無常。

〔訓讀〕

然らば則ち聖人の天下に在るや、寂莫虚無にして執すること無く競うこと無し。導きて而も先んぜず、感じて而して後に応ず。譬えば猶お幽谷の響、明鏡の像のごとし。之に対するものは其の来る所以を知らず、之に隨うものは其の往く所以を識る罔し。恍焉として而して有り、惚焉として而して亡し。動きて而も逾いよ寂かに、隠れて而も弥いよ彰らかなり。幽より出でて冥に入り、変化すること常無し。

〔和訳〕

だとするならば、聖人が天下に在るときは、寂莫として虚無であり、執することも競うこともない。先頭に立ちながら先んじることもなく、求められて後に応じる。たとえば幽谷のこだまや明鏡の映像のようなものである。それに対面するものはその出て来たゆえんを知らないし、それに追隨するものはその往つて返らぬゆえんを知らない。おぼろげのうちに存在し、とらえにくいままに消えてしまう。動きながらもますます静かであり、隠れながらもますます明らかである。幽冥のうちに出入し、変化してやまない。

二其為称也、因応而作。顕迹為生、息迹為滅。生名有余、滅名無余。然則有無之称、本乎無名。無名之道、於何不名。是以至人居方而方、止円而円。在天而天、処人而人。原夫能天能人者、豈天人之所能哉。果以非天非人、故能天能人耳。

〔訓読〕

其の称なづ爲るや、因り応じて而して作さる。迹あとを顕あらわすをば生と爲し、迹を息やすむるをば滅と爲す。生をば有あり余と名づけ、滅をば無なし余と名づく。然らば則ち有無の称は無名に本づく。無名の道は、何に於いてか名づけざらん。是を以て至人は、方に居りて而して方、円に止まりて而して円、天に在りて而して天、人に処りて而して人なるなり。夫の能く天にして能く人なる者を原もとぬるに、豈に天と人と能くする所ならんや。果して天に非ず人に非ざるを以て、故に能く天にして能く人なるのみ。

〔和訳〕

その名称というものは、縁に因り応じることによつて起おこるのである。足跡を現あらわすのを生といひ、足跡を消すのを滅といふ。生を有あり余と名づけ、滅を無なし余と名づける。してみると有無の称は無名に本づくのである。無名の道であるから何に名づけられないことがあるうか。

こういう次第であるから、至人は方形にあつては方形であり、円形にあつては円形である。天上にあつては諸天であり、人間にあつては人間である。その能く諸天となり人間となることのできるものを求めてみると、どうして諸天や人間がなることのできるものであらうか。はたして諸天でも人間でもないものである、故に能く諸天とも人間ともなることができるのである。

亦其為治也、故応而不為、因而不施、故施莫之広。応而不為、故為莫之広、故乃返於小成、施莫之広、故乃帰乎無名。

〔訓読〕

其の治ち爲るや、故もとより応じて而も為さず、因りて而も施さず。因りて而も施さず、故に施すこと之より広きは莫し。

應じて而も為さず、故に為すこと之より大なるは莫し。為すこと之より大なるは莫し、故に乃ち小成に返る。施こそすこと之より広きは莫し、故に乃ち無名に帰る。

〔和訳〕

その作用というものは、もとより縁に應じてしかも為さず、縁に因りながらしかも施さない。縁に因りながらしかも施さない、故に施すことこれより広大なものはない。縁に應じてしかも為さない、故に為すことこれより広大なものはない。為すことこれより広大なものはない、さればこそ小成に返る。施すことこれより広大なものはない、さればこそ無名に帰るのである。

○小成 無為の意だといわれる。『肇論研究』一〇四頁注一九三。

○帰乎無名 無名之道、於何不名(14二段)。

へ経曰、菩提之道、不可図度。高而無上、広不可極。淵而無下、深不可測。大包天地、細入無間。故謂之道。然則涅槃之道、不可以有無得之、明矣。而惑者觀神變、因謂之有、見滅度、便謂之無。有無之境、妄想之域、豈足以標榜玄道而語聖心者乎。

〔訓読〕

經に曰わく、菩提の道は図度す可からず。高くして而も上無く、広くして極む可からず。淵かくして而も下無く、深くして測る可からず。大にしては天地を包み、細にしては無間に入る。故に之を道と謂う、と。然らば則ち涅槃の道は有無を以て之を得可からざること明らかなり。而も惑う者は神變を觀て、因りて之を有なりと謂い、滅度を見て、便ち之を無なりと謂う。有無の境は妄想の域なり。豈に以て玄道を標榜し、而して聖心を語るに足る者ならんや。

〔和訳〕

經典にいう、菩提の道は計ることができない。高さはその上に出るものはなく、極めることのできない広さである。

深さはその下に在るものではなく、測ることのできない深さである。その巨大さは天地を包むほどであり、その微細さは無間に入るほどである。だから道というのである、と。

だとするならば、涅槃の道は有無によつて認識することはできないことが明らかである。しかも惑う人々は、神変を見て有であると思ひ、滅度を見て無であると思う。有無の境域は妄想の領域なのである。どうしてそれによつて玄道を標榜し、また聖心を云々するに足るものであろうか。

○無間 すき間のないところ。 ○玄道 菩提涅槃。

ト意謂至人寂怕無兆、隱顕同源。存不為有、亡不為無。何則、仏言、吾無生不生、雖生不生。無形不形、雖形不形。以知存不為有。經云、菩薩入無尽三昧、尽見過去滅度諸仏。又云、入於涅槃而不般涅槃。以知亡不為無。亡不為無、雖無而有。存不為有、雖有而無。雖有而無、故所謂非有。雖無而有、故所謂非無。然則涅槃之道、果出有無之域、絶言象之徑、断矣。

〔訓讀〕

意に謂えらく、至人は寂怕無兆にして、隱顕同源なり。存して有と為らず、亡じて無と為らず。何となれば則ち、仏言わく、吾には生と不生と無く、生ずると雖も生ぜず。形と不形と無く、形かたちわるると雖も形われず、と。以て知る、存して有と為らざることを。經に云わく、菩薩は無尽三昧に入つて、尽く過去に滅度せる諸仏を見る、と。又た云わく、涅槃に入りて而も般涅槃せず、と。以て知る、亡じて無と為らざることを。亡じて無と為らざれば、無なりと雖も而も有なり。存して有と為らざれば、有なりと雖も而も無なり。有なりと雖も而も無なり、故に所謂る非有なり。無なりと雖も而も有なり、故に所謂る非無なり。然らば則ち涅槃の道は、果たして有無の域を出でて、言象の徑を絶つこと断たまれり。

〔和訳〕

思うに至人は寂滅無為できざしがなく、隠顕同時である。存しても有とはならないし、亡しても無とはならない。なぜならば、仏はいう、私には生と不生とはないから、生じても生じない。形と不形とはないから、形われても形れない、と。これによつて知る、存しても有とはならないと。また經典にいう、菩薩は無尽三昧に入つて、過去に滅度した諸仏をことごとく見る、と。またいう、涅槃に入つてしかも般涅槃しない、と。これによつて知る、亡しても無とならないと。

亡じても無とはならないから、無であるけれども有である。存しても有とはならないから、有であるけれども無である。有であるけれども無である、故にいわゆる非有である。無であるけれども有である、故にいわゆる非無である。だとするならば、涅槃の道が有無の域を出ており、言語表現の路を絶つていふことははっきりしている。

○雖有而無、故所謂非有。雖無而有、故所謂非無。不真空論第二九段参照。

子子乃云、聖人患於有身、故滅身以歸無。勞動莫先於有智、故絕智以淪虛。無乃乖乎神極、傷於玄旨者也。經曰、法身無象、応物而形。般若無知、对縁而照。万機頓赴而不撓其神。千難殊对而不干其慮。動若行雲、止猶谷神。豈有心於彼此、情繫於動靜者乎。

〔訓読〕

子は乃ち云わく、聖人は身有るに思ふ、故に身を滅して以て無に歸る。労働は智有るに先んずる莫し、故に智を絶ちて以て虚に淪む、と。乃ち神極に乖き、玄旨を傷なう者なること無からんや。經に曰わく、法身は無象にして、物に應じて而して形わる。般若は無知にして、縁に対して而して照らす、と。万機に頓に赴きて而も其の神を撓めず。千難に殊なり対して而も其の慮を干さず。動くこと行雲の若く、止まること猶お谷神のごとし。豈に彼此に心有りて、

情の動靜に繋がるる者ならんや。

〔和訳〕

それなのに貴方はいう、聖人は身の有ることにわずらわされる、だから身を滅して無に帰る。苦勞は智の有ることに過ぎるものはない、だから智を絶つて虚に没するのである、と。それこそ精神の極意にそむき、玄妙の奥旨をそこなうものではないであろうか。

經典にいう、法身は無相であつて、物に応じて形をあらわす。般若は無知であつて、縁に対して照鑑する、と。万機にとみにおもむいてその精神をつかれさせることはなく、千難にそれぞれ対応してその思慮をそこなうことはない。動くときは行雲のようであり、止まるときは谷神のようである。どうして彼此にこころとられ、動靜にこころつなされるであろうか。

り既無心於動靜、亦無象於去來。去來不以象、故無器而不形。動靜不以心、故無感而不応。然則心生於有心、象出於有象。象非我出、故金石流而不焦。心非我生、故日用而不勤。紘紘自彼、於我何為。

〔訓讀〕

既に動靜に無心なれば、亦た去來に無象なり。去來するに象を以てせず、故に器として而も形われざる無し。動靜するに心を以てせず、故に感じて而も応ぜざる無し。然らば則ち心は有心より生じ、象は有象より出づ。象は我よりして出するには非ず、故に金石流れて而も焦げず。心は我よりして生ずるには非ず、故に日用して而も勤れず。紘紘するは彼よりす、我に於いて何をか為さん。

〔和訳〕

すでに動靜に無心なのであるから、去來においても無相である。去來するのには有相によらない、故に物となるもの

に現われないことはない。動靜するのに有心によらない、故に求められて応じないことはない。

だとするならば、心は有心から生じ、相は有相から出るのである。相はこちらから出たのではない、だから金石をも溶かす熱にも焦げないのである。心はこちらから生じたのではない、だから毎日つかつても疲れないのである。ごたごたするのは向うからするのであるから、こちらにとつては何でもない。

又所以智周万物而不勞、形充八極而無患。益不可盈、損不可虧。寧復痾癘中達、壽極双樹、靈竭天棺、体尽焚燎者哉。

〔訓 読〕

所以に智は万物に周くして而も勞れず、形は八極に充ちて而も患い無し。益して盈たす可からず、損らして虧く可からず。寧んぞ復た中達に痾癘し、壽は双樹に極まり、靈は天棺に竭き、体は焚燎に尽くる者ならんや。

〔和 訳〕

したがつて智は万物に周遍しながら疲れることがなく、身は八方に遍満しながら憂うることがない。加えても満たすことができず、減らしても少なくなることができない。どうして道中に病み、寿命は双樹の間につき、靈性は天人の棺につき、身体は荼毘につきるであらうか。

ル而惑者居見聞之境、尋殊応之迹。秉執規矩而擬大方。欲以智勞至人、形患大聖。謂捨有入無、因以名之。豈謂採微言於聽表、拔玄根於虚境者哉。

〔訓 読〕

而も惑う者は見聞の境に居て、殊應の迹を尋ねんとし、規矩を秉執して而も大方を擬からんとす。以て智もて至人を勞れしめ、形もて大聖を患えしめんと欲し、有を捨てて無に入ると謂いて、因りて以て之に名づけんとす。豈に微

言を聴表に採り、玄根を虚壞に抜く者なりと謂わんや。

〔和 訳〕

しかるに惑う者は、分別の世界に居ながら、感応の跡をたずねようとし、物差しを手にして無限を計ろうとする。そこで智によつて至人は疲れ、身によつて大聖はわずらうものとしようとし、有を捨てて無に入ると思い込んで、涅槃に名をつけようとする。どうして微言を分別を超えたところでえらび取り、玄道の根を虚無の地に抜きあげるものとおうか。